

こけし、かだる？秋保編

今回お招きした秋保の佐藤武志工人は、秋保こけしの伝統を踏襲しながらも、独自の世界観で多くの愛好家を魅了しています。



あまり人前に出ることを好まない佐藤工人を、こけしぼっこ小島が口説き落として実現した今回の「こけし、かだる?」。6歳のこけし好きの女の子からこけし愛好歴60年のツワモノまで、幅広い年齢層の方々にご参加いただきました。





前半は、参加者の皆様がお持ちくださったこけしを前に、皆様のこけしストーリーをうかがいました。東北への転勤を機にこけしに開眼した男性。ご夫婦でこけしを集めていらっしゃる方。お子さんがこけし好きで、出かける時は小さいこけしを持ち歩き、喫茶店に入ると、テーブルに出してこけしと一緒に茶を飲む、という可愛いエピソードも。

愛好歴の長い方々からは、こけしの収納方法や手入れの仕方について、お話をうかがうことができました。愛好歴60年にもなると、こけしの本数もケタが違います。5,000本以上というこけしを収納するために、隙間を開けず、棚にみっちりこけしを詰め込み、前にピアノ線を張ることで落下を防ぐというテクニックに、会場からは驚嘆の声が。また、あんまりツヤツヤにするのは好きじゃないんだけどね、というご意見とともに、乾燥してきたこけしを、布にくるんだ樁の実で磨くという技も教えていただきました。これは一度試してみたいですね。



後半は、まず佐藤工人に秋保こけしについて語っていただきました。秋保には、頭の剃り跡が青い「ヤロッコ」（男の子という意味の方言）というこけしや、頭頂部に「乙」という文字が書かれているこけしがあります。



この「乙」には、諸説あるようで、子どもの厄除けであったと言われていますが、佐藤工人からは卒塔婆に書かれた字に似ているという話や、参加者の方から、秋保の地名を入れたのではないかと、という説も飛び出し、その由来については、正確には分からないようです。

佐藤工人の仕事は、極小、やみよ、独楽、の三つに分けられます。こけしや木地玩具、台所道具、そのすべてをそのまま縮小することを可能にしているのは、佐藤工人の「小さくしたい」という情熱と、それを支える妥協のない技術です。





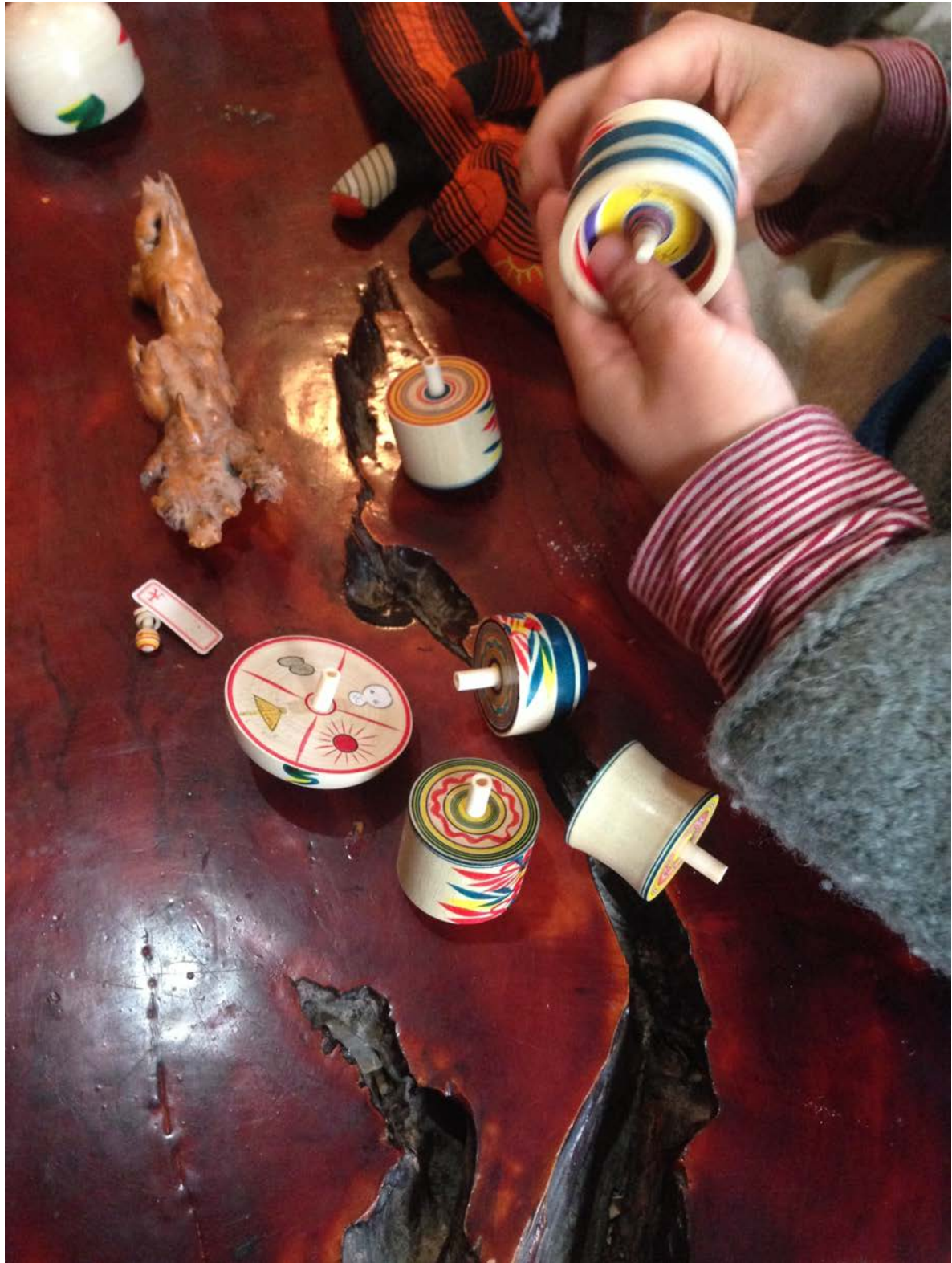
こけしにいたっては粟粒大で、あまりの小ささに、完成するまでに紛失してしまうこともあるのだとか。





やみよは、もともと赤ちゃんのおしゃぶりやがらがらとして使われており、輪のはまった棒を振ると、かたかたと優しい音がします。その技術を応用し、数十本、数百本の輪がはまったこけしやだるまが生まれました。しかも、極小こけしでその上やみよこけしという佐藤工人の技が極まったものも。さらに、輪の下に隠された本体にも、丁寧に絵付けがしてあるという徹底ぶり。どうやって絵付けしているのか、という質問に、「そりゃちょっとずつね。」とさりりと言っている佐藤工人に、会場からため息が漏れました。





また、佐藤工人の独楽は、一見こけしや蓋物の形をしているのですが（それとは分からないほど継ぎ目がないのです！）、次々に分解されてクルクル回り始めます。中には天気予報やすごろく、ルーレットになっているものも。あっと驚かすにはいられない作品の数々に、佐藤工人の遊び心を感じました。



小さいものが多いので、材料は5~6年前に買ったものを使い続けているし、庭の木や端材でもかまわない、趣味は家庭菜園と庭作り、売ることにあまり興味がない、コンクールに出すためのものより自分が本当に作りたいものを作りたい、淡々と己が極めたい道を思う存分極めている佐藤工人は、常人がたどり着けない世界に生きる孤高の工人でした。

そんな佐藤工人に、技術の伝承を求める熱い声が会場からあがっていましたが、「うーん、人に作ってるところ見られるの本当に嫌なんですよね。家内に見られるのも嫌。」とかわず佐藤工人。「何回も言ってるけどその頑固なところ何とかしないとね。」と食い下がるこけし愛好歴60年の大先輩。



佐藤工人が披露した超人的な技術に興奮冷めやらぬまま、佐藤工人がお持ちくださった極小こけし7本をめぐって、急遽、じゃんけん大会が催され、いつもに増して、熱い、熱い「こけし、かだる？ 第五回秋保編」は、幕を下ろしたのです。ご参加くださった皆様、本当にありがとうございました。またお会いしましょう！

